

学びとしての造形活動体験の検討 —幼児教育・保育を学ぶ体験者の記述から—

菖蒲澤 侑*

本研究は、幼児教育や保育を専門とする大学生が造形表現に取り組む授業において経験する造形活動体験を学びとして意義あるものとすることを目的に、造形活動を体験した学生がその体験について記述した文章から、造形活動体験によって起こる学びとその要因を検討するものである。表現主題、材料や用具、他者との関係について異なる条件を設定した造形活動を授業において実践した上でアンケートを行い、記述を分析した。その結果、造形活動の体験者が自覚しうる学びとその要因を整理し、体験することが学びにつながる造形活動を設計する上での示唆を得た。

Key words：造形活動，体験による学び，実感ある学び

1. はじめに

幼稚園教諭免許状または保育士資格取得のために学修が必要とされている内容に、保育内容「表現」領域に関する科目がある。これは音楽、造形、身体表現など様々な表現を含む領域であり、造形表現に関する授業については多く造形活動を体験する授業が行われている。そこでは学習者が自ら眼や手、身体を働かせ、頭で考え、心を動かしながら造形活動に取り組み、作品を制作し、体験を通して造形表現の意義やその支援について学ぶ。授業実施者は設定した教育目標に対して効果的と思われる条件を整えながら造形活動やその振り返りを設計し、授業設計において妥当な評価基準をもとに学習者の学びが評価される。しかし、授業内での造形活動は教育目標に対する到達度を評価するためのパフォーマンスとして機能するだけではない。むしろ評価される部分は造形活動の一面をとらえたものでしかなく、学習者が造形活動を体験することには、より広く学びとしての価値

があるものと思われる。

では、造形活動を体験する者の中にはどのような学びが起きていて、それはどのような要因により起こるのか。本研究では、造形活動に取り組む授業の履修者を造形活動の体験者と捉え、体験者自身が記述する「造形活動の学びとしての側面」を整理することで、体験者が自覚している、あるいは自覚しうる学びのモデルを形成し、造形活動体験による学びを体験者の実感に即したものとすることを目指す。

2. 造形活動における学び

1) 造形活動の体験により何が学ばれるか

造形活動を体験すること自体が学びとなることは、様々な研究、実践により示されている。名須川・高橋（2006）は「乳幼児は作品をつくるために遊びを行うのではない。私たちが生きている現在の文化において、保育者は子どもたちに様々な造形経験や遊びを提供することで、今を生きる子

* 人間学部児童発達学科

どもたちのさまざまな芽生えを育てているのである」と、造形経験、作品作りが様々な芽生え、学び、成長を起こすことを示している。また、小澤・岡田（2014）は主に大学生を対象とする研究において、創造活動のプロセスや方法についての理解や創造活動と親しむ態度や習慣を「創造的教養」と呼び、「このような創造的教養は知的教養とは必ずしも一致せず、創造活動についての体験的理解があることを意味している。」「『理解』や『知識』のみならず、『行為』の側面も含まれるべき」と、造形活動も含む創造活動の理解に行為が重要であり、それがあつる種の教養につながつることを指摘している。

本研究では幼児教育や保育を専門とする学生の造形活動体験を対象とすることから、幼稚園教育要領および保育所保育指針を参照し、造形活動が人の学びや成長にどのように関わるか整理する。これら資料は幼児教育や保育の専門性の手がかりであるとともに、教育者や保育者が乳幼児に寄り添い共感しながら専門性を発揮するためには、まず乳幼児期における造形体験に共感と実感を得ながら学ぶことが必要であると思われるためである。

表1は、幼稚園教育要領（2018）および保育所保育指針（2018）に示された表現領域のねらいと内容を表に表したものである。なお表1中の行頭記号は幼稚園教育要領および保育所保育指針のまま引用している。保育所保育指針における乳児保育については領域ではなく視点により示されているため省略している。

両資料において、ねらいの前文に「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して」とあるように、表現領域は表現行為自体を通して学び成長することが前提になっていることが分かる。では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して」何が学ばれるのか以下に分析する。以下〔〕内、幼は幼稚園教育要領、保は保育所保育指針、1～3は保育所保育指針1歳以上3歳未満児、3～は3歳以上児、行頭記号は表1ねらい欄の行頭記号を示す。

表中の「ねらい」では「豊かな感性をもつ」こと〔幼-（1）・保-1～3-①・保-3～-①〕、「感じたことや考えたことなどを自分なりに表現」し

ようとし、そのことを「楽しむ」こと〔幼-（2）・保-1～3-②・保-3～-②〕、生活や遊びの中で様々な体験を通して「イメージや感性が豊かになる」ことと、イメージを豊かにしながら「様々な表現を楽しむ」こと〔幼-（3）・保-1～3-③・保-3～-③〕がねらいとして示されている。

これらは確かに表現を通して起こることではあるが、知識や技能を身に付けることとは違い、子どもたちに起こるこれらの成長や学びを見とることが難しい。そこでは幼児教育や保育の支援者が、これらの学びを自身の実感を持って体験しており、表現活動によりこれらの学びが起こることを自覚、認識していることで、職能として現場で活用できるものであると考えられる。

2) 学びに繋がる造形活動の要素

では、前述の表現活動に寄る学びは、どのような内容の活動により引き起こされるのか。表1の内容を精読すると、《表現主題とその形成に関すること》《材料や用具に関すること》《他者との関係に関すること》に整理出来る。以下〔〕内、幼は幼稚園教育要領、保は保育所保育指針、1～3は保育所保育指針1歳以上3歳未満児、3～は3歳以上児、行頭記号は表1内容欄の行頭記号を示す。

まず、「感じたこと、考えたことなど」を、「自由にかいたり、つくったりなどする」こと〔幼-（4）保-3～-④〕や、「自分のイメージ」を「動きや言葉などで表現」すること〔幼-（8）・保-3～-⑧〕、「生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する」こと〔保-1～3-⑥〕など、感じたことや考えたこと、興味のあることや経験したことを、自分のイメージをもとに自分なりに表現する活動が示されている。これらは自分の内面を表現することであり、内面から何を表現するのかという、《表現主題に関すること》と整理できる。また、その表現主題を形成する土台となるものとして、生活の中で様々な音、形、色、手触り、動き、味、香り、美しいものや心を動かす出来事に触れることが示されており、これは《表現主題の形成に関すること》であろう〔幼-（1）・幼-（2）・保-1～3-③・保-3～-③〕。

表1 幼稚園教育要領および保育所保育指導における表現領域のねらいと内容

資料	ねらい	内容
幼稚園教育要領	〔感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。〕 1 ねらい (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。	(1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。 (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。 (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。 (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。 (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。 (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。 (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。 (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。
(二歳以上三歳未満児) 保育所保育指針	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。 (ア) ねらい ① 身体の諸感覚の経験を豊かにし、様々な感覚を味わう。 ② 感じたことや考えたことなどを自分なりに表現しようとする。 ③ 生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる。	① 水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。 ② 音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。 ③ 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。 ④ 歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。 ⑤ 保育士等からの話や、生活や遊びの中での出来事を通して、イメージを豊かにする。 ⑥ 生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する。
保育所保育指針(三歳以上児)	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。 (ア) ねらい ① いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 ② 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 ③ 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。	① 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。 ② 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。 ③ 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。 ④ 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。 ⑤ いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。 ⑥ 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。 ⑦ かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。 ⑧ 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

ー①・保-3ー②〕。同様に表現主題を形成することを示す内容として、「保育士等からの話や、生活や遊びの中での出来事を通して、イメージを豊かにする」ことも挙げられている〔保-1-3-⑤〕。

また、「いろいろな素材」や「様々な素材」に触れ、

親しみ、工夫して遊ぶことが挙げられており、これらは《材料や用具に関すること》として整理できる〔幼-(5)・保-1-3-①・保-3-⑤〕。

さらに、「様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う」〔幼-(3)・保-3-③〕ことは、表現をしながらあるいは表現を通して自分の感動

を他者に伝えようとするとともに、他者の表現から他者の感動が伝わること、また、感動を共有することであり、《他者との関係に関すること》となるであろう。

最後に、「かいたり、つくったりする」ことや「遊びに使ったり、飾ったりなどする」ことは、造形活動それ自体を指す内容である。〔幼－(7)・保－3～－⑦〕

以上の考察より、成長や学びにつながる造形活動の内容に関わる要素として、《表現主題とその形成に関すること》《材料や用具に関すること》《他者との関係に関すること》が導かれた。それを踏まえ、学びに繋がりうる造形活動を広く体験できる授業設計に取り組んだ。

3. 造形活動体験を含む授業の設計

本研究はB大学で2019年度前期に開講された授業「造形表現」を対象として行う。履修者はB大学に在籍し、保育及び幼児・児童教育を学んでいる学生3～4年生62名であり、3クラス(28名, 14名, 20名)に分かれて全15回の授業を行った。

前述の通り造形活動における題材の要素として《表現主題とその形成に関すること》《材料や用具に関すること》《他者との関係に関すること》の3要素を導いた。それを踏まえ、広く造形活動を体験することを意図し、3要素について指定がある活動とない活動をまんべんなく授業内で行うべく、表2に挙げる6題材を設定した。なお表現主題の形成については、それぞれの生活を過ごしている大学生が対象であることから授業内での要素としては取り扱わず、個々人に形成された主題に任せることを「指定なし」、表現の主題を活動のお題として授業者が指定しているものを「指定あり」としている。また、他者との関係における共

同作業は任意のチームを組み共同で制作することを許可した題材であり、すべての共同作業題材において若干名が個人作業を選択している。

題材A(図1)は、スズランテープを教室内に張り巡らし、カラービニール袋を使い、環境の変化を楽しむ題材である。材料のみ指定され、そこからどのように表現するか(表現主題)は体験者に委ねられている。



図1 題材A

題材B(図2)は、パステルを用いて色で遊ぶ活動である。粉状に削ったパステルを画用紙上に落とし混ぜることで、自分にとって美しい色を探る題材である。白い画用紙にパステルという材料・用具の指定はあるが、美しさを感じる色をどう解釈するかは自由である。個人作業で行った。

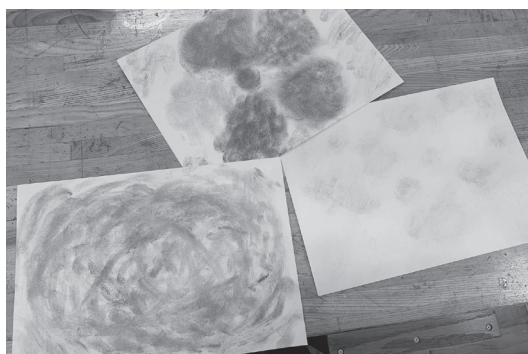


図2 題材B

表2 題材一覧

題材		表現主題	材料や用具	他者との関係
A	テープを用いた造形活動	指定なし	指定あり	個人・共同作業
B	パステルを用いた造形活動	指定なし	指定あり	個人作業
C	自然物を用いた造形活動	指定なし	指定あり	共同作業
D	ボックスアート	指定なし	指定あり	個人作業
E	絵の具遊び	指定なし	指定あり	個人・共同作業
F	街づくり	指定あり	指定なし	共同作業

題材 C(図 3) は、枝や葉、ドングリ、石などの構内に落ちている自然物を採集し、それを材料として表現に取り組む題材である。拾ったものをグループごとに共有し、「より素敵に見えるよう組み合わせ表現すること」を課題とした。「素敵」であることをどう解釈するかはグループにゆだねられているため、表現主題に指定がない課題である。

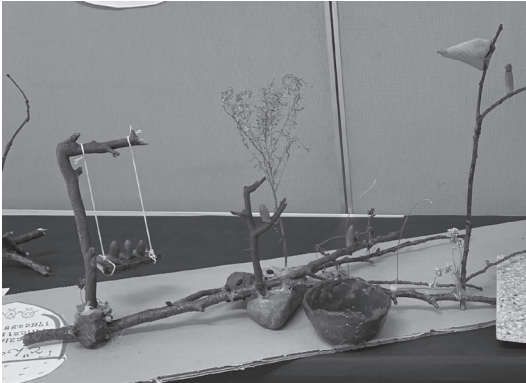


図 3 題材 C

題材 D(図 4) は粘土を握ってできた抽象的な形から見立てを行い、絵の具で塗装して箱の中におさめ、自分が見出した世界を作品に表現する題材である。粘土や絵の具、出来た形を収める箱など材料や用具は指定されているが、どのような形から何を見立てるか、表現の主題は指定していない。



図 4 題材 D

題材 E(図 5) は、大量の絵の具と大きな紙を用いて手のひらを使って自由に描画する造形活動である。材料と用具のみが指定されており、主題に基づき描く内容は自由である。



図 5 題材 E

題材 F(図 6) は「子どもが楽しめる街」を主題として指定し、材料と用具を自由に用いて造形する題材である。段ボール、色画用紙、生活廃材など、作りたい建物や乗り物、街の設備に合わせて材料と用具を選択・使用し、共同作業で取り組んだ。



図 6 題材 F

なお、題材 A と題材 E については個人作業と共同作業が入り交じる造形活動である。

以上の 5 題材を体験したのち、体験者にアンケートを行った。アンケート調査においては研究への協力を依頼し、研究に取り上げることをご了承した 54 件を対象として分析する。なお、図 1~6 についても、研究への協力を得たものを掲載している。アンケートのうち自由記述で設定した、「『造形で表現する』行為は人の成長にどのように影響しうるか、自分なりに考えて、その特徴を説明してみてください。」という設問への体験者の記述から、造形活動の体験者はその体験を学びとして

どのように自覚しているのか分析する。

4. 体験者の記述の分析

1) 造形活動自体についての記述から

まず、体験者は造形活動自体をどのように捉えているのか。体験者の記述を内容に応じて分類したところ、造形活動自体の特徴を記述する内容が22件みられた。なお、以下本章において「」内に示すものは全て、実施したアンケートでの記述である。

まず、造形活動の特徴である【作品が外在する】ことについて「完成するという直感を感じることが出来る」「出来上がった時の達成感を持ち1つのことに取り組む楽しさを知ることが出来る」などの達成感に関する記述や、「出来た作品に関して、“この人はどんな気持ちで作ったのだろうか”という考えるきっかけにもなる」「後から自分が作った作品を見返すと当時のことを思い出し、どんな気持ちで作っていたのかを作品からわかる。」といった作品との向き合い方についての記述が見られた。

また、「もっとこうしたい、こうすればよかったという次につながるきっかけ」「つぎはもっとこうしたい、こうしてみようという考え、次回もっとより良いものを作る成長」「やりたい、作りたいという気持ち一つで、いろいろなものを工夫して使って、作ることが出来る」「苦手や好きに気づくのみならず、その時に用いたアイデアをその後活用できる」など、【次の活動につながる意欲】に関する記述があった。

さらに造形活動の心地よさについて、「体や手を動かす、集中する、気持ちいい感触を楽しむなどをすることで、嫌なことを忘れる時間が出来る。」「言葉では表せないものを造形表現で表すことでストレス発散が出来る。」などの【発散】に関する記述と、「言葉に出すわけでもなく誰かに指図されるわけでもなく、自分の思う通りに手、頭を動かしていく」「造形で表現するときは失敗をしても取り返しがつくしやり直すことも出来るので、やりたいことを自由に表現できる」などの【自由な活動ゆえの心地よさ】を記述する内容が

あった。一方、「時には全然進まない時もあります」「どう表現しようかその過程では課題も出てくる。その課題を乗り越えるために頭を使い色々試したり工夫することで“試行錯誤しながら工夫する”力が身につく」など、困難に対して【試行錯誤】することを造形活動の特徴として記述しているものもあった。

また、造形活動を体験することにより「技術が上がる」「手先が器用になったりもしてくると思う」「素材同士の相性なども考えて学ぶ」など【知識・技術】が身につくことが挙げられていた。知識や技術の向上は「心も満たされる」「知性もより豊かになっていく」「感触や嗅覚、視覚なども養われる」ことにつながると記述されており、さらに「表現の幅が広がるためさらに自分を表現しやすくなる」というように次の表現につながるという記述も見られた。

2) 自己についての記述から

アンケートへの記述のうち、自分の変化、自分の発見、見直しなど、自己への視点が記述された回答は49件あり、全体の9割に見られた。前述の造形活動自体についての記述において知識や技術が身につくことにより「表現の幅が広がるためさらに自分を表現しやすくなる」という記述があったことから、また本論文の2-2)において示した表現主題に関する内容からも、造形活動においては自己への眼差しが重要であることが分かる。本節では、造形活動と造形する自己との関係について、体験者の記述を整理・分析する。

まず、「得意なことと苦手なことが分かる」「知らなかった自分の一面を知ることにつながる」「自分には“これが出来ている”ということを見つけるきっかけになるのではないか」「個性を知る」など【新たな自分を発見する】ことが記述されていた。ここでは新たな自分を見つけたり分かったりする以外に、「認める」「見直す」「理解する」「整理する」など、自分の新たな側面と向き合う様々な姿勢が挙げられていた。

また、【自由に自己を表現する】ことについて、「自由に自己を表現することのできる表現方法である」と考えた。そこに上手い下手はなく作った本

人が満足していればそれが正解となる」「自分の思うままに作り、だれにも邪魔されることなくできる」「気持ち、感じたこと、アイデアなどの自分のうちにあるものを作品として自由に表現することが出来る」という記述が見られた。これらは、自由であると感じながら表現をすることで造形活動が自己表現であることをより実感できることを示唆している。

では、造形活動で表現されている自己とは、どのようなものなのであろうか。「内に秘めたものを出すことが出来る」「自分の頭の中にあるイメージや気持ちを表に出す1つの手段」「普段は言えないことや言葉ではうまく表せないことを伝えることが出来るようになり自分自身を表現する」「自分で自分のことを言うことは簡単そうで難しい。造形は作品で表現することにより個性を出すことが出来る」などの記述から、普段は見えない、あるいは見せない【内面を可視化】しており、それが個性であると実感していることが読み取れる。

自己表現ゆえの【試行錯誤】に関する記述もいくつか見られた。「自分が納得するまでやり続けたり追及する。考える力、試行錯誤の力」「ここはどのように作るのがいいのかという葛藤」「自分の思っているものに向けて努力すること」という記述からは、造形活動で表現しているものが自己であり、だからこそ難しく、葛藤や努力が伴うことを示している。

3) 他者についての記述から

アンケートへの記述のうち28件に、自分への眼差しだけではなく、他者との関係から見いだされる学びについての記述が見られた。

まず、他者との【共同制作での協力】に関する記述である。「他の人と活動することにより協力することを学べる」「仲間と表現をすることで協力性が身につく。どうしたら良いものが出来るか話し合いを重ねて1つのものができ仲間の大切さに気付く」「自分だけでなくグループでやることで出来ない人の分を補ったり意見を出し合ったりして受容することや自分の意見を言うことや思い通りにいかない葛藤を通して成長できる」など、造形活動を他者と共有することで身につく力につ

いて言及している。ここでは「協同性」「リーダーシップ性」「チームワーク力」「目的達成への力」「コミュニケーション」「社会性」「多様性」などの言葉により、共同制作による学びが記述されていた。一方、「集団だからこそ個性が抑制されたり引込み思案に陥る可能性もあることを忘れてはならない」という記述は、【共同制作ゆえの葛藤】として体験者の実感がこもったものであり、考慮する必要があると思われる。また、「一緒に楽しむ」「友達と一緒に何かを作ったという思い出」といった、【共同制作だからこそその楽しさ】に関する記述も見られた。

共同制作をする中で、自分の造形活動に【他者の良さを取り入れる】ことについての記述も見られた。「いいところを吸収する」「何をしているんだろう？」と相手が何をしているのか興味を持ち、相手がやっていることをマネをしてみたり、自分の作品に相手の良いところを取り入れてみようと思う」「上手い人をまねする」「人の作った作品を見て次に思い出して取り入れることがある」などの記述である。これらはより良い造形活動を目指して自身の造形活動に他者の活動を参照するという内容である。さらに、「自分では気が付かなかった視点や考えに気づき、人は成長すると感じた」「考え方を変えてみよう、プラスにしてみよう」「造形で表現して先生から褒められたり友達と認め合うことで自分に自信が付き、個性が出していけると思う。」というように、他者との関わりによる【自身の内面へのフィードバック】についての記述も見られた。

また、「何を考えながらこの作品がつくられたのかなど想像力が膨らむ。」「言葉以外にも伝える方法があると気づき、伝えること自体が苦手ではなくなるのではないか」「どうやったら自分の気持ちを相手に伝えるかを考えたり」という記述から、他者との関わりにおいて、【伝える・伝わるために必要なこと】を学んでいることも読み取ることが出来る。

5. 造形活動体験者が自覚する体験からの「学び」とその要因

これらの要素をモデル化したものが図7である。矢印は因果関係を表しており、矢印の始点が要因となり矢印の終点の成果が得られることを示している。矢印の始点は造形活動体験が体験者にとって実感ある学びとなるための要素と考えられ

まず、造形活動の特徴としての【作品が外在する】ことは、【内面を可視化】することにつながり、そこから【新たな自分を発見する】ことや他者に【伝える・伝わるために必要なこと】の学びにつながっている。また、他者との関わりによる【自身の内面へのフィードバック】も【新たな自分を発見する】ことの要因になっている。さらに、造形活動において【試行錯誤】が必要なことにより、【知識・技術】を求め、そのことにより【自由に自己を表現する】力が伸びていく。また試行錯誤は【他者の良さを取り入れる】学びにもつながる。体験する造形活動が【自由な活動ゆえの心地よさ】を有することが要因となり、【自由に自己を表現する】ことが学びとして起こることも示された。

– 92 –

他者からの【自身の内面へのフィードバック】があることが整理された。これら要素を含む造形活動を丁寧に体験することで、体験者は【知識・技術】を得るのみならず、【内面を可視化】し、【新たな自分を発見する】ことや【自由に自己を表現する】ことを学ぶ。また、他者との関係の中で【伝える・伝わるために必要なこと】を学び、【他者の良さを取り入れる】ことも学びとして実感していることが示されている。

これは、造形活動を体験した体験者が記述した内容から導いたものであることから、造形活動の体験者が「実感を持って自覚しうる」学びとその要因であると考えられる。

6. おわりに

本研究により、体験することが学びにつながる造形活動を設計する上での示唆を得た。今後、これら要素を実践に応用し、体験者の反応を多面的に考察しながら、体験が学びとなる造形活動の実践および発展に取り組む。

一方、体験者の記述から学びとして読み取り整理したものの、要因と成果として整理しきれなかった要素もある。さらに本研究で得られた学びについて体験者のより深い自覚を促すためには、その評価の方法も検討しなければならない。また本研究では造形活動として制作活動のみを取り上げたが、観る造形活動である鑑賞についても考察する必要がある。さらに、乳幼児の表現は造形や音楽、言葉、身体など様々な方法が複合的に現れることが多い。乳幼児の教育や保育に寄り添う専門家が経験する造形活動としては、他の表現方法への接続や発展も視野に入れる必要があるものと思われる。

幼児教育や保育は、乳幼児ともに発見や発展、変化を楽しみながら乳幼児に寄り添うことが重要である。そのため、その専門を究めようとする学生が授業内で体験する造形活動においては、体験者が自身の変化や学びに実感を持ち自覚することが必要である。子どもと子どもに寄り添う大人とが取り組む造形活動が、学びや成長の糧として最大の効果と可能性をもつ活動となるよう、今後も

実践と研究を往還させて取り組んでいく。

引用文献

- 厚生労働省編（2018）. 保育所保育指針解説，フレーベル館，168 頁—175 頁，267 頁—277 頁。
 小澤基弘・岡田猛編著（2016）. 探る表現——東大生のドローイングからみえてくる創造性，あいり出版，1 頁。
 文部科学省（2018）. 幼稚園教育要領解説，フレーベル館，233 頁—243 頁。
 名須川知子・高橋敏之編著（2006）. 保育内容「表現」論，ミネルヴァ書房，80 頁。

（2019.9.25 受稿，2019.10.19 受理）